

乳母車の使用実態と事故調査

表 4 報

保健指導の内容の検討

研究第 3 部 高橋悦二郎

日本女子大学 松崎早苗

(第 1 表)

- 愛育病院保健指導部に子どもの定期健康診断の為に来所した母親 ……86名
 - 中野北保健所に 3 歳児健診の為に来所した母親 ……51名
 - 鳥取県で行なわれた母子保健講演会に参加した母親 ……63名
- 合計 200名

I 緒言

最近乳母車（ベビーカー）を使う母親が多くなって来たが、実際の程度に乳母車が使われているか、実態を調査した。又使用する為の諸条件の分析、使用上の問題点、更に事故との関係等についても調べ、乳母車（ベビーカー）の安全性について母親の意識を探り、今後どうあるべきか検討する。

II 調査対象と方法

質問紙による個人面接聴取法により、下記母親を対象に調査した。(第 1 表)

III 結果および考察

1. 調査対象者の特性

- (1) 対象者（母親）の年齢・学歴は第 2 表、第 3 表の通りであった。

第 2 表

母親の年齢	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
19 歳以下	0	0	0	0	0	0	0	0
20 歳～24 歳	5	5.8	1	2.0	4	6.3	10	5.0
25 歳～29 歳	37	43.0	17	33.3	11	17.5	65	32.5
30 歳～34 歳	27	19.8	21	41.2	22	34.9	70	35.0
35 歳以上	17	31.4	12	23.5	25	39.7	54	27.0
不明	0	0	0	0	1	1.6	1	0.5
計	86	100.0	51	100.0	63	100.0	200	100.0

第 3 表

母親の学歴	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
大学	32	37.2	6	11.8	2	3.2	40	20.0
短大	23	26.7	2	4.0	6	9.5	31	15.5
専門	5	5.8	7	13.7	7	11.1	19	9.5
高校	24	27.9	30	58.7	30	47.6	84	42.0
中学校	0	0	6	11.8	11	17.5	17	8.5
その他	1	1.2	0	0	6	9.5	7	3.5
不明	1	1.2	0	0	1	1.6	2	1.0
計	86	100.0	51	100.0	63	100.0	200	100.0

(2) 対象者（母親）の子どもの性別内訳は第4表の通りであった。

第4表

子どもの性別	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
男	88	63.8	49	54.5	62	49.6	199	56.3
女	50	36.2	38	42.2	58	46.4	146	41.4
不明	0	0	3	3.3	5	5.0	8	2.3
計	138	100.0	90	100.0	125	100.0	353	100.0

(3) 子どもの年齢

愛育病院：生後1か月から満14歳138名
うち満1歳以下45名（32.6%）

中野北保健所：生後10か月から満15歳90名
うち3歳児47名（52.2%）

鳥取：生後7か月から満16歳125名
うち満1歳以下4名（1.1%）

以上のように母親の年齢・子どもの年齢ともに、愛育病院が一番低く、次いで、中野北保健所・鳥取の順になっていた。すなわち愛育病院では、乳母車（ベビーカー）を「現在使用中」という者が多く、中野北保健所で

は「最近使用終了、鳥取では「以前使用した」という者が多かった。

したがって、これら地区を比較する場合地域差の他に、使用した時期も考慮する必要があるだろう。

(4) 対象者の住環境について

対象者の居住としている、住宅形式・居住地域・外出の便利さは、第5表、第6表、第7表の通りであった。

「外出の便利」というのは、日常の買物をする所までの近さ、交通の便（停留所からの距離）などで判断したものである。

第5表

住宅について住宅形式	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
エレベーター付共同住宅	25	29.1	1	2.0	0	0	26	13.0
エレベーター無共同住宅	21	24.4	19	37.2	1	1.6	41	20.5
一戸建	40	46.5	29	56.9	62	98.4	131	65.5
その他	0	0	2	3.9	0	0	2	1.0
不明	0	0	0	0	0	0	0	0
計	86	100.0	51	100.0	63	100.0	200	100.0

第6表

居住地域	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
団地	4	4.7	3	5.9	0	0	7	3.5
住宅地	71	82.5	43	84.3	9	14.3	123	61.5
商店街	10	11.6	5	9.8	2	3.2	17	8.5
工業地	0	0	0	0	0	0	0	0
農村地	0	0	0	0	50	79.3	50	25.0
その他	1	1.2	0	0	2	3.2	3	1.5
不明	0	0	0	0	0	0	0	0
計	86	100.0	51	100.0	63	100.0	200	100.0

第7表

外出の便利さ	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
便利	63	73.3	34	66.7	17	27.0	114	57.0
ふつう	13	15.1	15	29.4	32	50.8	60	30.0
やや不便	10	11.6	2	3.9	13	20.6	25	12.5
不便	0	0	0	0	0	0	0	0
不明	0	0	0	0	1	1.6	1	0.5
計	86	100.0	51	100.0	63	100.0	200	100.0

住宅形式は、鳥取が98.4%一戸建であったのに対し、愛育病院の53.5%、中野北保健所の39.2%が、共同住宅（エレベーター付、エレベーター無）の居住者であった。

居住地域も、愛育病院の82.5%、中野北保健所の84.3%が、住宅地であるのに対し鳥取では79.3%が、農村地区であった。

外出の便利さは、愛育病院の88.4%、中野北保健所

の96.1%が「便利」又は「ふつう」であったが、鳥取では「ふつう」又は「やや不便」というのが71.4%であった。

このように、住環境は、東京の2地区（愛育病院と中野北保健所）はあまり差はなかったが、鳥取は農村地区ということで、特徴的結果となったようである。

(6) 母親が外出する際、子どもの世話をする者がいるかどうか、については第8表のような結果であった。

第8表

母親外出時子どもの世話をする者の有無	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
いる	42	48.8	27	53.0	47	74.6	116	58.0
ない	44	51.2	24	47.0	12	19.0	80	40.0
不明	0	0	0	0	4	6.4	4	2.0
計	86	100.0	51	100.0	63	100.0	200	100.0

普段子どもの世話をしている母親が外出する際、母親以外に子どもの面倒をみる者が、常時いると回答したのは、鳥取が一番多く、74.6%であった。次いで中野北保健所53.0%、愛育病院48.8%となった。

この結果は、核家族化の程度を表わしたものとも考えられよう。

(6) 母親が家事以外の仕事に従事しているかどうかの結果は第9表の通りであった。

第9表

母親が家事以外に仕事を持っているか	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
持っていない	73	84.8	38	74.4	15	23.8	126	63.0
家の内で持っている	6	7.0	6	11.8	15	23.8	27	13.5
家の外で持っている	6	7.0	5	9.8	33	52.4	44	22.0
不明	1	1.2	2	4.0	0	0	3	1.5
計	86	100.0	51	100.0	63	100.0	200	100.0

東京の2箇所（愛育病院・中野北保健所）では、家事以外の仕事を持たない母親の方が多かった（愛育病

院84.8%中野北保健所74.4%）鳥取では逆に家の内・外で家事以外の仕事を持っている母親の方が76.2%と

多かった。

たこと(79.3%)などに関係していると思われる。

これは、鳥取の対象者の多くが保健婦又はその経験者であったこと、農村地区に居住している者が多かつ

(7) 自家用車の有無は第10表の通りであった。

第10表

自家用車の有無	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
持っている	47	54.6	13	25.5	51	81.0	111	55.5
持っていない	28	32.6	32	62.7	12	19.0	72	36.0
不明	11	12.8	6	11.8	0	0	17	8.5
計	86	100.0	51	100.0	63	100.0	200	100.0

自家用車の所有率が一番高いのは鳥取で81.0%であった。次いで、愛育病院54.6%、中野北保健所25.5%となった。

交通機関が発達していないことなどが考えられよう。

2. 乳母車(ベビーカー)の所持率

乳母車(ベビーカー)の所持率は、第11表のようであった。

鳥取の自家用車所有率が高いのは、農村地区で他の

第11表

乳母車(ベビーカー)の所持率(使用率)		愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
		回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
持っている(使った)	1台	55	64.0	41	80.3	47	74.6	143	71.5
	2台	24	27.9	6	11.8	2	3.2	32	16.0
	3台	1	1.1	1	2.0	0	2	2	1.0
持っていない(使わなかった)		6	7.0	3	5.9	14	22.2	23	11.5
計		86	100.0	51	100.0	63	100.0	200	100.0

全体の88.5%(200名中177名)が乳母車(ベビーカー)を使っていた。そのうちの3台持っている(使った)と回答した者が2名(1.0%)、2台持っている(使った)と回答した者が32名(16.0%)みられた。

94.1%であったが、鳥取では87.8%と東京2地区よりやや低かった。

3. 乳母車(ベビーカー)を所持しない者

(1) 乳母車(ベビーカー)を所持しない理由は、第12表のようなものであった。

愛育病院での所有率は93.0%、中野北保健所では

第12表

乳母車(ベビーカー)を持っていない(使わなかった)理由	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
子どもがまだ小さい	2	33.0	0	0	0	0	2	8.7
必要がないから	3	50.0	2	66.7	13	92.9	18	78.3
その他の	2	33.3	1	33.3	0	0	3	13.0
不明	0	0	0	0	1	7.1	1	4.3
計	6名中	100.0	3名中	100.0	14名中	100.0	23名中	100.0

(但し、回答は複数回答数式)

高橋他・乳母車の使用実態と事故調査

乳母車（ベビーカー）を所持しない者が少数なため、このことは、家族構成や抱っこ・おんぶなど乳母車ははっきりとは言えないが、結果では、所持しない理由（ベビーカー）以外の方法に対する意識とも関係するとして一番多かったのは「必要ないから」という理由と思われる。

であった。とくに、鳥取では92.9%まで「必要ない」（2）乳母車（ベビーカー）以外の乳幼児を連れての外出を理由にあげていた。方法は、第13表の通りであった。

第13表

乳母車（ベビーカー）以外の乳幼児を連れての外出方法	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
おんぶ	0	0	2	66.7	8	57.1	10	43.5
抱っこ	5	83.0	0	0	3	21.4	8	34.8
抱っこベルト	0	0	1	33.3	0	0	1	4.3
自動車	3	50.0	0	0	1	7.1	4	17.4
その他	3	0	0	0	0	0	0	0
計	6名中	100.0	3名中	100.0	14名中	100.0	23名中	100.0

（但し、回答は複数回答式）

乳母車（ベビーカー）を所持しない者が乳幼児を連れて外出する際、多く用いられている方法は「おんぶ」43.5%と「抱っこ」（34.8%）であった。

愛育病院で「おんぶ」を用いる者が一人も見られなかったのは、子どもがまだ小さく首がすわっていないため「おんぶ」ができないためであろうと思われる。

第14表

乳母車（ベビーカー）の入手方法	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
買った	62	77.5	35	72.9	33	67.3	130	73.4
新品を買った	18	22.5	6	12.5	8	16.3	32	18.1
中古を買った	6	7.5	8	16.7	3	16.3	22	12.4
その他	0	0	0	0	0	0	0	0
不明	1	1.3	0	0	0	0	1	0.1
計	80名中	100.0	48名中	100.0	49名中	100.0	177名中	100.0

（但し、2台以上持っている者がいるため、回答は複数である）

入手方法で一番多かったのは「買った」で73.4%であった。「新品を買った」というのは入手前に一度も現物を見ていないことを前提とし質問したので、お祝品などであっても事前に現物を見たものは「買った」という方に入れた。

第15表

乳母車（ベビーカー）購入時参考としたもの	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
育児書	7	11.3	4	11.4	0	0	11	8.5
祖母・知人の意見	13	21.0	7	20.0	8	24.2	28	21.5

店員の説明	17	27.4	12	34.3	16	48.5	45	34.6
マ ス コ ミ	2	3.2	4	11.4	1	3.0	7	5.4
その他(参考にしたものなし)	32	51.6	10	28.6	6	18.2	48	36.9
不明	2	3.2	2	5.7	3	9.1	7	5.4
計	62名中	100.0	35名中	100.0	33名中	100.0	130名中	100.0

(但し、回答は複数回答式)

購入時に参考したのは「店員の説明」というのが一番多く34.6%であった。

しかし「その他」として「何も参考にしなかった」というのも多く、とくに、愛育病院では51.6%と高かった。

祖母・友人など乳母車(ベビーカー)を使用した経験のある者の意見や育児書を参考にした者があまり多くなかったのは意外な結果であった。

(8) 乳母車(ベビーカー)を購入する時、留意したのは第16表のような点であった。

第16表

乳母車(ベビーカー)購入時の留意点	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
使 い や す さ	27	43.5	23	65.7	18	54.5	68	52.3
耐 久 性	8	12.9	5	14.3	16	48.5	29	22.3
安 全 性	39	62.9	17	48.6	23	69.7	79	60.8
経 済 性 (価 格)	1	1.6	5	14.3	4	12.1	10	7.7
形 (姿 勢 向 き)	20	32.2	9	25.7	23	69.7	52	40.0
メ ー カ ー	3	4.8	1	2.9	0	0	4	3.1
デ ザ イ ン ・ 色 ・ 柄	1	1.6	4	11.4	7	21.2	12	9.2
そ の 他	6	9.7	2	5.7	0	0	8	6.2
不 明	0	0	0	0	2	6.1	2	1.5
計	62名中	100.0	35名中	100.0	33名中	100.0	130名中	100.0

(但し、回答は複数回答式)

乳母車(ベビーカー)の機種によって若干違っていたが、第1に安全性(60.8%)第2に使いやすさ(52.3%)、次いで形(赤ちゃんの向き・姿勢)(40.0

%)耐久性(22.3%)があげられていた。

(4) 乳母車(ベビーカー)を購入する際、訪問した販売店の軒数は第17表のようであった。

第17表

乳母車(ベビーカー)購入時販売店の訪問軒数	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
1 軒 だ け	26	41.9	12	34.3	11	33.3	49	37.7
2 軒 以 上	14	22.6	9	25.7	18	54.5	41	31.6
不 明	22	35.5	14	40.0	4	12.1	40	30.8
計	62名中	100.0	35名中	100.0	33名中	100.0	130名中	100.0

(但し、2台以上購入した者があるため回答は複数になる)

1軒の販売店ですぐ決めた者が37.7%で、2軒以上訪問した者31.9%よりわずかに多かった。とくに、愛育病院では41.9%が1軒で決めた者が多かった。しかし逆に鳥取では2軒以上訪問したの方が54.5%と多

くなっていた。

これはデパートなど機種を多く取り揃えている販売店の有無などと関係があるのではないかと思われる。

高橋他・乳母車の使用実態と事故調査

5. 使用した乳母車（ベビーカー）の形態（赤ちゃんの向き）は第18表、第19表であった。

使用した乳母車（ベビーカー）の型及び形式（赤

第18表

使用している乳母車（ベビーカー）の型	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
ボックス型	5	6.3	11	22.9	28	57.1	44	24.9
シート型	21	26.3	18	37.5	2	4.1	41	23.2
ボックス・シート両用型	46	57.5	10	20.8	17	34.7	73	41.2
コンパクト型	30	37.5	14	29.2	1	2.0	45	25.4
その他	2	2.5	0	0	1	2.0	3	1.7
不明	3	3.8	1	2.1	2	4.1	6	3.4
計	80名中	100.0	48名中	100.0	49名中	100.0	177名中	100.0

(但し、2台以上持っている者があるので回答は複数となる)

第19表

乳母車（ベビーカー）の形式（赤ちゃんの向き）	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
対面式	11	13.8	2	4.2	6	12.2	19	10.7
進行式	16	76.3	44	91.7	14	28.6	119	67.2
対面進行両用	8	10.0	2	4.2	29	59.2	39	22.0
不明	3	3.8	0	0	0	0	3	1.7
計	80名中	100.0	48名中	100.0	49名中	100.0	177名中	100.0

(但し、2台以上持っている者があるので回答は複数)

(1) 型では「ボックス・シート両用型」が一番多く41.2%であった。あとは「シート型」「ボックス型」「コンパクト型」がほぼ同率（25%前後）であった。

しかし、鳥取では「ボックス型」が57.1%と一番多かったのに対し、愛育病院では「ボックス型」は6.3%と少なくなっていた。

(2) 形式（赤ちゃんの向き）は「進行式」が67.2%と一番多かった。「対面式」は中野北保健所では4.2%とごく小数であったのに対し、愛育病院では13.8%とやや多くなっていた。

なお、鳥取で「対面・進行両用式」の回答が多かったのは「ボックス型」の乳母車（ベビーカー）を使用した者が多かったためと考えられる。

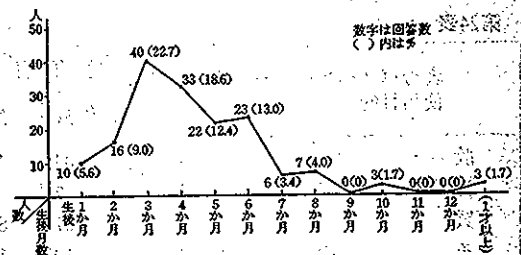
鳥取では「ボックス型」の乳母車（ベビーカー）が一番多く使用されていたが、愛育病院では「ボックス型」を使用した者は小数であったこと、「対面式」の乳母車（ベビーカー）は中野北保健所よりも愛育病院で多く使用されていた、という結果は、各地区の地域的環境の違いの他に、使用された時期が各地区間で2

年から5年位差があったため、当時のそれらの型形式の商品の普及率なども関係しているであろうと思われる。

6. 乳母車（ベビーカー）の使用状況

(1) 乳母車（ベビーカー）の使用開始時期は第20表の通りであった。

第20表



早いのは生後1か月からというのもあったが累計すると66.7%が生後3か月から6月の間に乳母車（ベビーカー）を使い始めていた。

この時期は丁度乳児の首がすわる時期と一致し、乗せる母親も首のすわりを目安に使用開始時期を決定し

ているようであった。

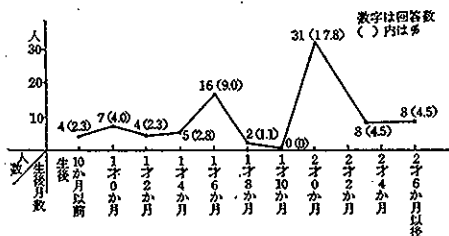
(2) 乳母車(ベビーカー)の使用終了時期は第21表の通りであった。

まだ乳母車(ベビーカー)を使用中で使用終了時期は不明という回答が51.2%と多く、はっきりとはしないが、終了時期は1歳6か月から2歳の間に回答が多かった。

乳幼児の歩行への興味、運動機能の発達による歩行の確立などと関係があると思われる。

(8) 乳母車(ベビーカー)の1日の使用回数1回の使用時間は、第22表、第23表の通りであった。

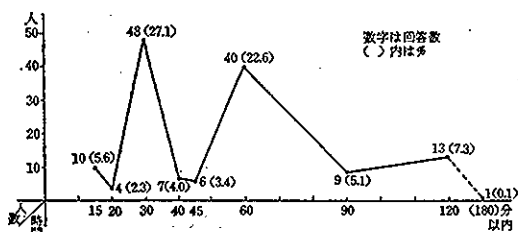
第21表



第22表

乳母車(ベビーカー)の使用回数	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
1日 1回	29	36.2	12	25.0	8	16.3	49	27.7
〃 2回	25	31.2	24	50.0	21	42.9	70	39.5
〃 3回以上	8	10.0	8	16.7	6	12.2	22	12.4
その他	9	11.3	0	0	0	0	9	5.1
不明	9	11.3	4	8.3	14	28.6	27	15.3
計	80	100.0	48	100.0	49	100.0	177	100.0

第23表



1回の使用時間は、30分から60分というのが65.0%で一番多かった。最低は10分、最高は180分であった。

使用状況は、乳母車(ベビーカー)の型によって多少違うようであった。ボックス型の使用開始時期は他の型よりやや早かった。コンパクト型は使用開始時期が遅く、使用終了時期も遅かったが、中には生後2か月からコンパクト型を使用しているという回答もあり、考えさせられた点である。

1日の使用回数は、1回か2回というのが多く、67.2%になっていた。最高は1日4回、少ないのは週に2回位であった。

7. 乳母車(ベビーカー)の使用目的

乳母車(ベビーカー)の使用目的は第24表の通りであった。

第24表

乳母車(ベビーカー)の使用目的	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
散歩	34	42.5	31	64.6	26	53.1	91	51.4
日光浴	7	8.8	3	6.3	9	18.4	19	10.7
買い物	67	83.8	43	89.6	31	63.3	141	79.7
その他	10	12.5	4	8.3	8	16.3	22	12.4
不明	3	3.8	1	2.1	2	4.1	6	3.4
計	80名中	100.0	48名中	100.0	49名中	100.0	177名中	100.0

(但し、回答は複数)

高橋他・乳母車の使用実態と事故調査

乳母車（ベビーカー）が一番多く使用されていたのは、買物に行くとき（79.7%）であった。次が散歩51.4%となった。
日光浴というのは乳母車（ベビーカー）を戸外に置いて動かさずに使用することで、これは10.7%と他の目的に比べて少数であった。
その他の回答の内容は、風呂に行く時、上の子の幼稚園の送り迎え、掃除中子どもを外に出すため、農作

業の時子どもを入れておく、というのであった。
買物に行くとき、という回答が一番多かったのは、母親が買物に出る際子どもの面倒をみる者が他にいないという核家族化が関係しているものと思われる。
8. 乳母車（ベビーカー）の収納場所
乳母車（ベビーカー）の収納場所は第25表の通りであった。

第25表

乳母車（ベビーカー）の 収納場所	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
玄関	34	42.4	16	33.4	16	32.6	66	37.3
物置（倉庫）	9	11.3	7	14.6	9	18.4	25	14.1
車庫（ガレージ）	3	3.8	0	0	5	10.2	8	4.5
アパート・マンションの入口	6	7.5	0	0	1	2.0	7	4.0
その他 屋内	2	2.5	3	6.2	7	14.3	12	6.8
その他 戸外	6	7.5	9	18.7	7	14.3	22	12.4
不明	20	25.0	13	27.1	4	8.2	37	20.9
計	80	100.0	48	100.0	49	100.0	177	100.0

収納場所が一番多かったのは、玄関で37.3%であった。次いで、物置（倉庫）14.1%で、軒下など戸外に置いている者も12.4%あった。とくに中野北保健所では、戸外に置くというのが玄関に次いで多く18.7%であった。
玄関に置く場合、乳幼児を乗せる状態のまま置く場合と折りたたんで置く場合とがあり、共同住宅居住

者や玄関の狭い住居の場合は置き場所に困っているようであった。アパートや団地の居住者の中には、一応屋内ではあるが入口の階段の下や踊り場に置いていると回答したものもあった。
9. 乳母車（ベビーカー）使用中の事故
乳母車（ベビーカー）使用中の怪我や事故の状況は、第26表の通りであった。

第26表

乳母車（ベビーカー）使用中の 事故・故障	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
子どもの転落	11	13.8	16	33.3	14	28.6	41	23.2
部品の破損により子どもが怪我	3	3.8	1	2.1	1	2.0	5	2.8
部品の破損により母親が怪我	0	0	1	2.1	1	2.0	2	1.1
故障使用中部品が破損	2	2.5	9	18.8	5	10.2	16	9.0
ブレーキのかけ忘れによる事故	0	0	3	6.3	2	4.1	5	2.8
振動による事故	3	3.8	2	4.2	1	2.0	6	3.4
付属品を子どもがのみ込む	0	0	0	0	0	0	0	0
その他の	11	13.8	0	0	2	4.1	13	7.3
事故・故障の経験なし	48	60.0	18	37.5	22	44.9	88	49.7
不明	4	5.0	8	16.7	6	12.2	18	10.2
計	80名中	100.0	48名中	100.0	49名中	100.0	177名中	100.0

（但し、回答は複数回答式）

乳母車（ベビーカー）を使用していて何らかの危険な経験をした者は40.1%であった。（177名中71名）

事故の中で一番多かったのは、乳幼児の転落であった。これは乳幼児が乳母車（ベビーカー）の中で立ち上がりバランスを失って外へ落ちたものと考えられる。

次いで多かったのは、使用中の部品の破損であった。これは直接乳幼児又は母親に被害はなかったがやはり危険なことであろう。破損の最も多かったのは車輪部分で、使用中ぐらつについてはずれた、という回答が多かった。

また、「その他」の中で特に目立ったのはベビーカーには買物かごが付いていないため、押手のところに荷物をかけたところバランスが崩れベギーそのもの

第27表

S G マークの知名度	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
知っている	41	51.2	16	33.3	20	40.8	77	43.5
知らない	33	41.3	31	64.6	27	55.1	91	51.4
不明	6	7.5	1	2.1	2	4.1	9	5.1
計	80	100.0	48	100.0	49	100.0	177	100.0

乳母車（ベビーカー）を所持していた者の43.5%がSGマークを知っていた。SGマークは東京中心にPRされていることもあって、東京のとくに現在乳母車（ベビーカー）を使用中の母親が一番よく知っているようであった。その点では鳥取の方も予想以上に知名度が高かった。これは鳥取の回答者の多くが保健婦又

第28表

乳母車（ベビーカー）の必要度	愛育病院		中野北保健所		鳥取		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
必要である	63	78.7	43	89.5	39	79.6	145	82.0
必要でない	9	11.3	2	4.2	2	4.1	13	7.3
わからない	2	2.5	1	2.1	3	6.1	6	3.4
不明	6	7.5	2	4.2	5	10.2	13	7.3
計	80	100.0	48	100.0	49	100.0	177	100.0

全体の82.0%の者が、乳母車は「必要である」と回答していた。これはかなり高い率であったと言える。

しかし、母子衛生研究会の昭和48年の調査*では、必要度約50%という結果も出されている。

が、後ろへ倒れた、という回答が多数あった。これは本来荷物をかけるところでないところにかけてのであるから母親の不注意ではあるが、乳母車（ベビーカー）を買物に行く時使用することが多くなっている以上、荷物を置く所についても配慮が必要ではないか。

今回の調査では、明らかに何らかの実害のあった事故のみの回答であるが、その他に「転落しそうになった」とか「怪我しそうになった」などの漠然とした危険感などを含めると、乳母車（ベビーカー）使用者の大部分が危険を感じたことがあったのではないかとと思われる。

10. SGマークの知名度

SGマークを知っているかどうかは第27表の通りであった。

はその経験者で乳幼児に関する事柄に関心が高いためではないかと思われる。

11. 乳母車（ベビーカー）の必要度

乳母車（ベビーカー）を使用してみてやはり乳母車（ベビーカー）は必要かどうか、については、第28表の通りであった。

* 母子保健 No.174 昭和48年10月1日発行 付録
母子用品（のりもの）についての調査

財団法人 母子衛生研究会関西支所

12. 各設問の相関

各設問の相関は以下の通りであった。ただし、これ

高橋他・乳母車の使用実態と事故調査

以外のものは顕著な傾向がみられなかったので省略した。

- (1) 母親外出時子どもを世話する者の有無と乳母車（ベビーカー）所持率の関係は第29表のようであった。

第29表

乳母車（ベビーカー）の所持		持っている		持っていない	
母親外出時子どもの世話をする者		回答数	%	回答数	%
い	る	101	57.7	15	71.4
い	ない	74	42.3	6	28.6
計		175	100.0	21	100.0

母親が外出する際乳幼児を世話する者が必ずいる家庭の方が乳母車（ベビーカー）の所持率が低かった。逆に母親以外に子どもの世話をする者がいない家庭では乳母車（ベビーカー）の所持率が高かった。核家族家庭では乳母車（ベビーカー）は必需品であろうか。

- (2) 住宅形式と乳母車（ベビーカー）の型の関係は第30表のようであった。

ボックス型は一戸建の家で最も多く用いられ、エレベーター付共同住宅では、1台も所持されていないかった。

エレベーター付共同住宅では、コンパクト型の所持率が他の形式の住宅より多くなっていった。

第30表

住宅形式	ボックス型		シート型		ボックス・シート両用型		コンパクト型		その他	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
エレベーター付共同住宅	0	0	4	10.0	15	20.5	11	25.0	1	33.4
エレベーター無共同住宅	8	18.2	12	30.0	12	16.4	10	22.7	1	33.3
一戸建	36	81.8	24	60.0	46	63.1	23	52.3	1	33.3
計	44	100.0	40	100.0	73	100.0	44	100.0	3	100.0

このように、住宅形式は所持する乳母車（ベビーカー）の型を決定する要因となっていると思われる。

- (3) 使用目的と乳母車（ベビーカー）の関係は第31表のようであった。

第31表

使用目的	ボックス型		シート型		ボックス・シート両用型		コンパクト型		その他	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
散歩	26	38.2	22	34.4	32	28.8	24	32.9	1	25.0
日光浴	4	5.9	2	3.1	11	9.9	3	4.1	0	0
買物のその他	33	48.6	32	50.0	59	53.2	42	57.5	3	75.0
計	68	100.0	64	100.0	111	100.0	73	100.0	4	100.0

どの型も買物や散歩に使用される場合が多かったが、散歩には、ボックス型、ボックス・シート両用型が多く用いられ、買物には、コンパクト型、ボックス・シート両用型が多く用いられるという傾向がややみられた。

このように、使用目的と乳母車（ベビーカー）の型は、ある程度関係があると思われる。

- (4) 乳母車（ベビーカー）の型と事故の関係は第32表のようであった。

事故が一番多かったのは、シート型で所持台数に対するべ事故率は61.0%であった。次いで、ボックス

・シート両用型53.4%であった。コンパクト型は40.0%で、4つの型の中では一番事故率が低かった。

また、事故の中ではどの型でも乳幼児の転落が一番多かった。シート型は部品の破損率も高くなっていた。

折たたみ式携帯用コンパクト型の事故が世間で騒がれている程多くなかったのは意外であった。その理由として、この型の商品が出回りはじめて間がなく、使用期間が短いこと（上の子のお下がりを使うケースが少ないなど）が考えられるが、構造自体が外見からの印象よりも安全に作られていることも考えられよう。

第32表

乳母車(ベビーカー)の型 事故	ボックス型		シート型		ボックス・シート両用型		コンパクト型		その他	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
子どもの転落	12	27.3	12	29.3	17	23.3	6	13.3	0	0
部品の破損により子どもが怪我	0	0	2	4.9	3	4.1	0	0	0	0
部品の破損により母親が怪我	0	0	0	0	1	1.4	0	0	1	33.3
故障使用中部品が破損	4	9.1	7	17.1	5	6.8	0	0	0	0
ブレーキのかけ忘れによる事故	1	2.3	1	2.4	3	4.1	0	0	0	0
振動による事故	1	2.3	1	2.4	3	4.1	3	6.7	0	0
その他	1	2.3	2	4.9	7	9.6	9	20.0	1	33.3
事故・故障の経験あり 小計	19	43.3	25	61.0	39	53.4	18	40.0	2	66.7
事故・故障の経験なし	25	56.7	16	39.0	34	46.6	27	60.0	1	33.3
計	44	100.0	41	100.0	73	100.0	45	100.0	3	100.0

また外見上はいかにも危なっかしいので母親がかえってよく注意して使用するためということも考えられよう。

しかし、コンパクト型、殊にバギー等では荷物置場の不備からベビーカー自体が倒れるという新しいタイプの事故もあり、その使用方法に問題が残されているように思われる。

13. 乳母車(ベビーカー)の安全性に対する母親の意識とその問題点

アンケート結果からもわかるように、乳母車(ベビーカー)の使用者の約半数がそれを使用中に事故など何らかの危険を感じているようであった。とくにその中でもコンパクト型のベビーカーはその危険性が懸念されているようである。

このような状態にもかかわらず、乳母車(ベビーカー)

を使う母親は、その安全性・乳幼児への影響をあまり考えないで安易に使用している、という意見もある。

そこで、ここでは、母親の乳母車(ベビーカー)の安全性についての意識度と、それに相反する「便利さ・使いやすさ」について、どのように捉えているかを探り、今後この「安全性」と「使いやすさ」についてどう考えればよいのかを検討してみたい。

(1) 安全性の意識度

前述のアンケート結果の通り、乳母車(ベビーカー)購入時の留意点では、第1に「安全性」(60.8%)、第2に「使いやすさ」(52.3%)をあげていた。

しかし、愛育病院では、第1位「安全性」(62.9%)、第2位「使いやすさ」(43.5%)となったのに対し、中野北保健所では、第1位が「使いやすさ」(65.7%)、第2位が「安全性」(48.6%)となっていた。*これは、対

第33表

型 購入時の留意点	ボックス型		シート型		ボックス・シート両用型		コンパクト型		その他	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
使いやすさ	12	27.3	16	39.0	27	37.0	24	53.3	1	33.3
耐久性	13	29.5	3	7.3	9	12.3	2	4.4	1	33.3
安全性	21	47.7	15	36.6	41	56.2	19	42.2	1	33.3
経済性(価格)	1	2.3	6	14.6	3	4.1	2	4.4	0	0
形(姿勢・向き)	11	25.0	8	19.5	21	28.8	13	28.9	0	0
メーカー	0	0	1	2.4	1	1.4	2	4.4	0	0
デザイン・色・柄	3	6.8	4	9.8	5	6.8	2	4.4	0	0
その他	4	9.1	0	0	2	2.8	4	8.9	1	33.3
計	44名中	100.0	41名中	100.0	73名中	100.0	45名中	100.0	3名中	100.0

(但し、回答は複数)

象者の子どもが、愛育病院では満1歳前後が多く「現在使用中」の状態。中野北保健所では満3歳前後で「2、3年前に使用した」という状況の違いにもよるのではないと思われる。このことから、時代の移り変わりとともに、徐々に「使いやすさ」第一から「安全性」第一へと母親の意識が変化してきているのではないとも思われる。

アンケート回答は複数回答式

(2) 乳母車（ベビーカー）の型との関係

乳母車（ベビーカー）の型と購入時の留意点の関係は第33表のようであった。

これによると「ボックス型」を購入した者は、第1に「安全性」(47.7%)、第2に「耐久性」(29.5%)、第3に「使いやすさ」(27.3%)を挙げていたが、「コンパクト型」を購入した者は、第1に「使いやすさ」(53.3%)、第2に「安全性」(42.2%)、第3に「形」を挙げていた。

(3) 住宅との関係

次に、住宅形式と購入時の留意点の関係をみてみると第34表のようであった。(但しエレベーター付共同住宅とエレベーター無の共同住宅はまとめて「共同住宅」とした)

第34表

住宅 購入時の留意点	共同住宅		一戸建	
	回答数	%	回答数	%
使いやすさ	27	43.5	40	35.4
耐久性	3	4.8	25	22.1
安全性	27	43.5	52	46.0
経済性(価格)	2	3.2	8	7.1
形(姿勢・向き)	15	24.2	36	31.9
メーカー	4	6.5	0	0
デザイン・色・柄	1	1.6	11	9.7
その他	5	8.1	3	2.7
計	62名中	100.0	113名中	100.0

(複数回答)

これによると、一戸建住宅居住者は「使いやすさ」(35.4%)よりも「安全性」(46.0%)の方を多く取り上げていたが、共同住宅居住者は「使いやすさ」と「安全性」に同じウェイト(43.5%)を置いて購入していることがわかった。

(4) 乳母車（ベビーカー）の安全性に対する母親の意識と意見

これらアンケートの結果から次のようなことが推測される。

母親は、乳母車（ベビーカー）を購入する際、「安全性」をまったく無視してはいないが、実際乳母車（ベビーカー）を使うとなると、住宅事情（収納場所）や道路事情（交通量・横断歩道橋）など生活環境の諸問題があり、「安全性」ということを多少犠牲にしなければならない状態にあるのではないのか。

乳母車（ベビーカー）の型の中ではボックス型が一番「安全性」が高いと認識されているようである。したがって事情が許せば子どもの安全のために、ボックス型を使いたいと思っているのではないだろうか。第35表のように、一戸建住宅居住者の方が、ボックス型やボックス型に近い両用型の乳母車（ベビーカー）を使用する割合が多くなっていることから推測できよう。

「乳母車（ベビーカー）は子どもへの影響を考慮して安全性を第一に考えなければならない、ということは充分承知しているが、現実の問題としてそれは難しい。」というのが、現在の大多数の母親の意見ではないだろうか。

ところが、この「使いやすさ」というのには2つの意味が含まれていると思われる。一つは「生活の実情に合ったもの」という意味で、これはある程度納得できるものであろうが、もう一つ「母親の身勝手」という意味の使いやすさがあると思われる。母親自身が少しでも楽をしたいために、子どもが犠牲になっている状態である。今まではどちらかというと後者の意味の使いやすさが多かったのではないだろうか。必要以上に長時間子どもを乗せたり、母親の足手纏いにならないようにするため乳

第35表

住宅 型	ボックス型		シート型		ボックス・シート両用型		コンパクト型		その他	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
エレベーター付共同住宅	0	0	4	10.0	15	20.5	11	25.0	1	33.4
エレベーター無共同住宅	8	18.2	12	30.0	12	16.4	10	22.7	1	33.3
一戸建	36	81.8	24	60.0	46	63.1	23	52.3	1	33.3
計	44	100.0	40	100.0	73	100.0	44	100.0	3	100.0

母車（ベビーカー）に子どもを入れて目を放してしまふ、など子どものことを全く考えていないような使い方をしているのが見受けられる。また、乳母車（ベビーカー）による事故の多くは、母親の誤使用のためであるとも言われている。

これらのことは、母親の育児意識、子どもへの愛情などの問題とも関わってくるが、乳母車（ベビーカー）の安全性ということについては、製品を見ただけではわからない部分もある。また、乗っている乳幼児も自分の口から「痛い」とか「苦しい」とか言わないこともあって、その乳母車（ベビーカー）が安全であるかどうか判断しにくい場合もある。そういう点から最近「安全認定基準」により、見えない部分までチェックされるようになったことは意義があると思われる。母親としても「安全」の基準がわかり、乳母車（ベビーカー）選択の目安となろう。

なお、SGマークについては、現在乳母車（ベビーカー）使用中の母親でも約50%しか知らない。設定されてから日も浅いこともあり、今後、販売店やマスコミなどを中心に、よりSGマークの主旨内容が理解普及されるよう、各界の努力が望まれる。

IV 結 論

乳母車（ベビーカー）は乳幼児を持つ家庭の約90%で利用されていた。

使用目的は、買物に行く時が最も多く、次いで散歩に

行く時というのが多かった。

使用時間は、1日1、2回、1回30分から60分というのが多かった。

ボックス型は一戸建家庭で多く用いられ、シート型、折たたみ式携帯用のコンパクト型は共同住宅、核家族家庭で多く用いられる傾向があった。

乳母車（ベビーカー）の使用は、乳児の首のすわりを目安に開始され、歩行の確立、行動の活発化によって終了されていた。

乳母車（ベビーカー）使用中、危険な経験をした者は約40%で、乳幼児の転落というのが最も多かった。事故発生率が一番高いのはシート型で、現在世間で問題となっている「コンパクト型は事故危険率が高そうだ」ということは、今回の調査結果では出てこなかった。

乳母車（ベビーカー）の安全性に対する母親の意識として、子どもへの影響を考えれば、安全性を第一に考えなければならないと大部分の母親は承知している。然しながら現実の問題として、狭い住居、高層住宅、収納場所の問題等から、使いやすさが第一になって、安全性がやや犠牲になっているふしもかなりみられた。

乳母車（ベビーカー）は母親が使用者であると同時に乗る乳幼児も使用者の一人である。母親と子どもの双方の使い易さを考えなければならないが、乳母車による事故も少くない現在、何よりも安全性は第一に考えられなければならない。この点からもまだまだ乳母車（ベビーカー）は再検討されるべきである。